

## まえがきに代えて

『農業をやろうよ』（東洋出版、二〇〇六）を発刊してから三度目の正月を迎えました。精農家の開発した素晴らしい農業技術を紹介して、プロもアマも本物の農業をやろうと呼びかけたものでした。おかげさまで好評を賜り感謝しております。

しかし、このわずかの間にも、世界の食料と農業事情は厳しさを増し、日ごとに飢餓人口を増やし、食糧争奪戦の姿を見せ始めました。しかも経験したことのない百年は続くかという長期デフレに突入し、世界中が混沌としています。

日本も地球規模の食糧危機に巻き込まれかねません。国内農業も現状では不安です。

本書は『農業をやろうよ』に続く提案として、恐ろしい食糧危機の回避策を「食う」ことの見直しから分かりやすく提案します。そうすれば国民は健康を取り戻し、農業も安泰になるというハッピーエンドの物語です。

とはいっても、事は食料問題です。後に引けない著者の気持ちがり、書きつぶりは重量級になっています。読者の皆様には、この心を酌み取っていただき、一言居士ぶりと内容の重さにご理解を賜りたいと思います。なお本書では「食糧」は米や小麦にトウモロコシなど飼料を含む穀物のこと、

「食料」は食品全般のことと使い分けました。

## 序章 小さな歴史から

世界の農業生産事情がおかしくなってきました。食糧の増産が思うようにならないのです。そして最低水準の食事にさえありつけない人々、つまり飢餓人口が増え続けています。地球温暖化とともに、難解で厄介な問題の発生を知る必要があります。

いずれの問題も、このまま進行させていいわけがない代物です。しかも世界はインフレから長期デフレ経済に変わっています。これまでの成功物語では今後を乗り切れません。

考えてみると、デフレは大波とサーフィンの関係のようなものです。次々に襲ってくる大波を巧みに利用して楽しむスポーツだと思っています。右肩上がりのインフレでガチガチにこった肩と石頭を、軽やかにみほぐせるサーフィンの時代、肩の荷を下ろすチャンスの世界とも考えられます。



## 第二章 六十年前に経験した 苦しい食料不足

六十年少し前といえば第二次世界大戦終結の直後、日本では大東亜戦争に敗れて間もなくのころです。

若い人には知らない人も多いようですが、日本は国家の命運をかけてアメリカと大掛かりな戦争をして、歴史上初めて敗れたのです。しかも完敗を喫し、この報いは今も続いています。

わが陸海軍が戦闘を中止したのは昭和二十年八月十五日です。四年弱の大戦おわいぐさでした。

日本軍は、軍中央部の作戦ベタや陸軍と海軍のツツパリなどで、不統一な戦闘を繰り返しました。おまけに兵隊とは死ぬものと教育されたので（東条英機の作った戦陣訓「生きて虜囚の辱めを受けず」などが原因です）、生きて帰って元気を取り戻し、再びやっつけに行くこともありませんでした。

国益をないがしろにした戦略や組織間の不統一は、今の政府や省庁にそのまま当てはまります。





## 第二章 五十パーセントを超えている 食料自給率

いよいよ私たちの食料事情と農業生産状況の本当の情報を知る章をスタートすることにします。急ぐことはありませんのでゆるりとまいります。

数字やくだくだしい長文が続き、面倒くさい話の連続ですけども、なるほど！ というところもあり、坂道の途中に置いてあるベンチのようにホッとする場所も用意したつもりです。

この章では、大事なことをチェックします。初めて耳にすることが多いと思います。

日本の食料自給率は三十九パーセントで先進国中最も低いとか、四十一パーセントに上昇したとか、いずれにしても厳しい状況にあると喧伝され、ニュースとして流されています。ところが本当はこんなに低くはありません。

日本人の食い物を担っている農家の頑張りを、なぜ過小評価するのでしょうか。しかも、この情





### 第三章 恐ろしい日本人の

## 「スギカフンシヨウ」



いよいよ私たち日本人の勝手気ままな「食べ方」に切り込みます。おそらくかなりの人が耳に障りますので覚悟してください。

これは健康に長生きする秘訣ひけつでもありますから、心を空にして、グラバと一緒に考えてください。切り込むという事は「正すべし」ということです。お前ごときに自分の食い方までとやかくいわれたくないと思われるでしょうが、あなたの「その食い方」に大変な問題が潜んでいるのです。

一人ひとりが早く気づかなければなりません。もしかして、あなたの今日の一食、明日の一口が、あなたの命を縮め、国を滅ぼしてしまうかもしれません。

これから展開される内容は、食の悪習を矯正することで自分自身も健康になり、大切な食料を生産している農業を生き返らせる簡単な処方箋です。またこの処方箋は、心配の要らない食料と農業

## 第四章 日本人は「食い方」を 改めることが大課題

本章では、五十パーセント強という実質食料供給水準をさらに向上させながら、世界の食料不足と食料争奪戦に困らない日本をつくるため、私たちが考え、行動する方法を探っていきます。

政府が低いと喧伝している食料自給率に一喜一憂する必要はありません。実際は五十パーセント少々あるわけですから、これでひとまず気持ちを楽しみましょう。そして楽になったところで、これから一緒にその方法を考えてみませんか。

私たちの食に対する無節操と、尋常とは思えない食いすぎ、まだ食べる食品の捨てすぎなど、即刻改めることが必要になっています。実態は第三章で触れたとおりです。

いい加減な食い方を続けていけば、糖尿病や心疾患などの生活習慣病を招き、医療費（保健費用）を増大させるなど、本人も辛いことだし社会に迷惑をかけてしまいます。それよりデフレ新時代に



## 第五章 農業パワーアップの三銃士



日本農業の改造、パワーアップが早急に求められていることは、ここまでの流れで理解していただけだと思います。

次の問題は、どうやってパワーアップすればいいのか、要はその算段が重要ということです。以下三つに分けて考えます。

その一「新人農家と昔からの農家が共存できる生産現場の仕掛けづくり」です。農家の新しい関係づくりといってもいいでしょう。現実には結構困難と思いますが避けて通れません。

その二「新人農家や農業会社の育成、人づくり」です。やる人がいなければ、仕掛けをつくっても魂の入れようありません。

その三「持続的で最強の農業の選択と実行」です。もちろん農水省が長いこと推し進めている化学



## 第六章 農業再生の鉄人「五人衆」

政府の近代化農業で怪しくなりかけている日本の農業を、コロンブスの「地鶏卵」の方法で再生している民間の人たちを「農業再生の鉄人」と称し紹介します。

申し訳ないけど料理の鉄人など問題じゃありません。農業再生の鉄人は将来性のある新しい農業を開発したスゴイおじさんたちで、すぐにも勲章を差し上げたい気持ちです。

その人たちと超一級の技術とは・・・

「岩澤信夫さんの不耕起移植栽培」

「高松求さんのミラクル畑作」

「飯山一郎さんの植物性乳酸菌運動」

「小林一年さんのファームとエコタウン」







## 第七章 農業入門の

### インフォメーション

いよいよ最終章です。農業再生の鉄人「五人衆」が頑張っても、それを経営に生かし継承していく多くの農家がいなくては話になりません。

ところが絶滅危惧種のような農家では、その先がおぼつかないのです。農家の子供たちが農業に就かなくなり、多くの農地は荒れ放題。日本の農業はどうにも具合の悪いところまで来てしまいました。農業以外から農業参入者を迎えること、「国内農業移民」がどうしても重要になってきました。未経験者がいきなり農家になるには、農業のハードルは高いと思います。しかし、自給自足農業、ホビー農業なら、その気があれば誰でもやれます。農業生産法人や個人の農家とコラボレーションしながらやっていけばよいのです。先に述べた「石垣農家論」を実践すれば困難は薄れます。

着実に段階を踏みしめ、計画的に生計を得る農業者になられてはどうですか。心を軽くして、気

